

声明文

2007年10月26日 日本惑星科学会

10月21日、宇宙航空研究開発機構は、月探査機「かぐや」が計画された月周回観測軌道に到達し、観測機器を常に月面に向ける定常制御モードへの移行に成功したと発表しました。日本惑星科学会は、各国が本格的月探査に踏み込む中、日本が先陣を切って本格的月探査を開始できたことは非常に重要な意義があると考えます。この探査によって月の起源と進化についての理解に対して「かぐや」が大きく貢献する貴重なデータを取得することを期待するとともに、日本惑星科学会はこの問題について共に大きな前進をもたらしたいと考えております。

「かぐや」(SELENE)は、1990年代に旧宇宙開発事業団と旧宇宙科学研究所の共同のミッションとして開始されて、多くの人々が計画の実施にむけて努力を続けてきました。そのなかには惑星科学会会員も少なからず含まれております。「かぐや」は、9月14日のH-IIAロケットによる打ち上げ後、10月はじめに月に到達し、2機の子衛星の分離に成功しました。そして、いよいよ本衛星による月観測が開始されます。ミッション計画の立案当時から現在にいたる10余年の歳月の中で、月探査を巡る世界の状況は大きな変貌を遂げました。月は今や、太陽系の中で最も多くの探査が計画されている探査対象天体となっています。この世界の潮流の中において、日本が先陣を切って本格的月探査を開始できたことは非常に重要なことです。

われわれは、「かぐや」による本格的月探査に大きな期待を寄せています。現在、月の起源としては、約46億年前の原始地球に火星サイズの天体が衝突した放出物から形成されたという、ジャイアントインパクト(巨大衝突)説が、有力です。形成されたときの月は、ほぼ全球が融けていたと考えられています。ところが、そこからどのように現在の月の姿になったのか、表と裏の違いがなぜ生まれたのかが、未だ大きな謎になっています。「かぐや」の詳細な観測結果により、この謎が解かれることが期待されます。さらに、これらの謎は月という1天体の問題に留まらず、地球を含めた惑星全般の初期進化を理解する上で鍵となるものです。われわれは、「かぐや」がもたらす世界最先端のデータを最大限に活用し、月、地球、太陽系に関する科学成果の創出に貢献していく所存です。

また、「かぐや」は月探査に留まらず日本の今後の太陽系探査の進展において新しい潮流を生み出すものであると確信しております。惑星科学会はその流れを促進すべ

く、今後も科学的見地からどのような惑星探査を行うべきか議論し、日本が月、惑星、太陽系の生い立ちやそこで生じる現象の理解において国際的にも高く貢献できるように進めていきたいと思えます。その先にある太陽系の理解は人類の知的資産として有意義であることに留まらず、探査へと向かう知的冒険心、それを達成しうる科学技術の進展は日本国民の夢や希望を高揚し、我々の精神を豊かにするものであると考えております。そうした活動において日本惑星科学会は積極的に貢献していく所存です。